

歴史遺産を活かした国際交流への歩み

NAGAWA-BRECKS EXCHANGE PROJECT BASED ON HISTORICAL HERITAGE

大竹 幸恵（長和町教育委員会文化財担当課長）

OTAKE SACHIE

(CHIEF, CULTURAL PROPERTY DIVISION, NAGAWA-MACHI BOARD OF EDUCATION)

1. はじめに

長和町の黒耀石体験ミュージアムは、本州最大規模の黒耀石原産地として知られる霧ヶ峰高原の一角にある星糞峠の麓に位置している。交通の便が悪い山間部にありながらも、子ども達を中心として年間13,000人近くの方が体験学習に訪れる。そのうち黒耀石の石器づくりは5,000人を超えて、各種の体験の中で最も人気が高い。その理由の一つとしては、産地が限られているにもかかわらず全国各地で発見されうるという存在感と、日常的には体験できない石器づくりの素材として加工しやすいという達成感があげられる。

全国から当地の博物館に訪れる子ども達の質問で最も多いのが、「なぜ、この町で採れる黒耀石が、遠い

地域まで持ち運ばれていたのか。」という問い合わせである。この質問は、考古学研究における重要な研究テーマの一つともいえるものであり、また、黒耀石体験ミュージアムに毎年授業で訪れる地元の子供たちと一緒に学ぶ博物館活動のテーマでもある。

2. 調査が続く遺跡の中のミュージアム

2004年に建設された黒耀石体験ミュージアムの周囲には、星糞峠の黒耀石を利用した旧石器時代の大規模な遺跡群が広がっている。また、背後にある星糞峠から北東側の虫倉山斜面の一帯には、黒耀石の包含層を狙って、山体そのものを切り崩すように黒耀石を採掘し始めた縄文時代の黒耀石鉱山が広がっている。



図1 調査が続く遺跡の中の博物館：史跡公園と黒耀石鉱山展示室「星くそ館」のオープン（2021年7月）



図2 遺跡教室「検出に成功した探掘当時の地面に立って考える」(2018年)



図3 黒耀石鉱山展示室「星くそ館」の保存展示 (2021年)

ミュージアムの隣には、明治大学の黒耀石研究センターが並んでいるが、この「遺跡・研究所・博物館」という組み合わせは、子ども達の意見を基に答申された『黒耀石のふるさと創生事業』という基本構想を支える柱となっている。また、黒耀石体験ミュージアムは、「調査が続く遺跡の中のミュージアム」をコンセプトとして、その運用が取り組まれてきた。博物館は、調査・研究と保存・活用の両輪を支えるシンクタンクであり、未来に伝えるべき史跡と共にフィールドミュージアムを構成している。

博物館の主役は、子ども達である。「何故、黒耀石は…？」を問う遺跡教室では、本物を目の前にして、「天然ガラスの黒耀石は、切れ味の鋭い道具（石器）の原料として人気があった。」から始まる様々な理由を子ども達が一緒になって考えてくれた。展示された石器を食いつくように見ていた小学校3年生は、「黒耀石をみんなに分けてあげた長和町の縄文人は、心が優しかった。」という。星糞峠の黒耀石鉱山を見学した6年生は、「互いに協力し合い、苦労して手に入れた黒耀石を分かち合うことは、1万年の間、戦争のない平和な生活を送った縄文人の知恵だった。」と授業で作成した黒耀石新聞にその意見をまとめている。そして、今年の春、黒耀石鉱山の地下の様子が見学できる新たな保存展示施設「星くそ館」を訪れた子ども達は、4mを超えて掘り込んだ採掘坑を目にし、「こんなにも苦労して手に入れた黒耀石を分かち合った縄文人は、みんなと仲良しになりたかったんだ。」と言つてくれた。新型コロナの感染拡大・ウクライナでの戦争という問題を抱える現実社会の中で、何が大切か…。

そんな日常の思いが、ふと口にしたこの言葉に込められていたようである。大地に刻まれた過去の真実を残す遺跡には、同じ人間として何が大切な引き出す大きな力があるのではないだろうか。

3. 世代を超えて学んだことを社会に発信

黒耀石体験ミュージアムでは学習教材としての遺跡の有効性を強くアピールし、年齢の異なる子ども達を対象に概ね3段階からなる学習プログラムを提供してきた。

その第1段階は、博物館において道具づくりの体験学習プログラムを経験し、歴史を楽しみながら基礎的な学習をする過程である。この導入部ともなる体験学習の実践は、就学前の子ども達から大人を含め、幅の広い世代を博物館活動に受け入れる窓口ともなっている。

第2段階は、道具をつくるだけでなく、それらを使う屋外での体験学習プログラムを経験し、昔の生活を理解するための総合的な学習をするプログラムである。教科を横断する総合的な学習の実践が学校教育の指針として提唱された当初、地元の中学校では、発掘実習や測量、出土資料の分析など、考古学研究の成果がどのようなプロセスで歴史事象の解明に繋がってきたのかを理解するための、フィールドワークを交えた実習も行っていた。しかし、残念ながら現在は、教育現場のカリキュラムの推移によって、本プログラムに充てる授業時数の確保が難しくなっている。

第3段階は、自分達が学んだこと、感動したこと

社会に発信する試みである。この取り組みは、今日も中学生を中心として継続的に実践している。具体的には、年に一度、博物館とそれを取り巻く遺跡において開催される考古学的なイベント「黒耀石のふるさと祭り」のスタッフとして活躍するプログラムである。

ミュージアムが中心になって企画する「黒耀石のふるさと祭り」は、感受性の豊かな子ども達が、地域社会を構成する多分野・多世代のスタッフとともに地域の未来を考える場となっている。子ども達は地域社会の一員として、自分のできることを自分自身の言葉や行動で表現する経験を得るのである。こうした、社会との結びつきの中に子ども達の学習を位置づけることは、次の世代を育成することに繋がるものと信じている。

地域の子ども達の参加によって開催してきたこのイベントは、現在、新型コロナ禍によってその体制を変更せざるを得ない状況下に置かれている。しかし、子ども達が受け止めている地域の魅力を広く発信しようという学びの視点は、様々な形で今も引き継がれている。

4. パブリック考古学と国際理解教育

(1) 博物館を窓口とする国際交流

黒耀石体験ミュージアムが子ども達の意見を指針として取り組んできた、体験学習や遺跡教室をはじめとした教育プログラムは、少しずつではあるが、地域の歴史遺産を担う次世代教育に繋がろうとしている。その代表的な成果の一つが「長和青少年黒耀石大使」による国際交流事業の実践である。そして、この試みは、地域の歴史に親しむことを起点として、世界を視野に入れた学びの扉を開こうとしている。

子ども達の国際理解教育として盛んなホームステイをはじめとする国際交流については、制定後初めての改正となった教育基本法第5号関連に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と謳われている。

このことを受け止め、長和町では、身近な歴史遺産を活かした交流事業とすることについて検討を重ね、



図4 「黒耀石のふるさと祭り」(2019年)

新石器時代（縄文時代）に、生活資源として地域の特色ある石器石材を採掘し、その特異な遺跡景観が星糞峠の黒耀石鉱山とよく似ているイギリスのフリント鉱山「グライムズグレイブス遺跡」を保存・活用する地域と交流することになった。

交流のための相談窓口となっていたいたのは、イギリスのセインズベリー日本藝術研究所である。交流地域の範囲は、遺跡のあるセットフォードを中心とするノーウォーク州ブレックランド地域となり、それぞれに一般市民を含む実行委員会が組織された。

日本では、国際交流というと、交流先の行政組織と「姉妹都市提携」を結ぶという手続きが一般的であるが、長和町では、実質的な活動を博物館が中心となって取り組む「歴史遺産を活かした教育活動」と位置付けた。連携の協定も交流活動の拠点となる博物館同士で結び、さらに、イギリス側との協議の結果、世界でも初めてとなる『双子遺跡の協定』を結んだのである。

(2) 長和青少年黒耀石大使の活動

長和青少年黒耀石大使の制度は、中学2年生から高校2年生を対象として、地域の魅力を世界に発信する広報活動の任務を担う大使を公募するという形で2016年に始まり、現在、3期生と4期生が渡英に向けての研修に取り組んでいる。

長和町には高等学校がないため、地域の博物館では、中学卒業以降の年齢層との繋がりが希薄となる点が大きな課題とされてきた。大使の対象年齢は、この世代との繋がりを念頭に置いている。



図5 世界初の『双子遺跡協定』締結
グライムズグレイブス遺跡において（2016年）

黒耀石大使の主な活動は、まず、事前研修として、小さな頃から通い親しんだ地域の遺跡について学びなおし、その概要説明とともに遺跡から受け止めた祖先からのメッセージを英語によってプレゼンするというものである。また、イギリスでは、このプレゼンと併せて、一般市民を対象とした英語での黒耀石を用いた石器づくりのワークショップを開催している。

この英語によるプレゼンとワークショップは、自分たちが学んだことを、自分自身の表現で社会に伝えるという学びの延長上にある。大使たちはみな、緊張しながら活動していたが、活動の窓口となるエンシェントハウスミュージアムからは、同世代のヒストリークラブのメンバーが参加し、メッセージの受け手からワークショップの協力者へと、次第に大使達をサポートする関係が構築されていった。耳を傾けてくれる人達に出会った黒耀石大使のメンバーたちは、心からより多くのことを伝えたいと思い、また、そのことによって、自分が育った故郷の日常をいかに理解しているかを、自分自身に問いかけるようになつていったようである。

黒耀石大使は、帰国後の任務として、改めて黒耀石のふるさと祭りが開催される遺跡に立ち、イベントに参加して下さった方たちの前で、黒耀石鉱山のプレゼンを披露し、イギリスでの活動報告を行った。キラキラ光る瞳は、ふるさとの遺跡にありながら広い世界を見渡しているようでもあった。



図6 英語での黒耀石の石器づくりワークショップ（2016年）